



Title	文末から見る日本語の特徴
Author(s)	莊司, 育子
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2014, 13, p. 19-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56951
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

文末から見る日本語の特徴

荘司 育子

【要旨】

CJLCにおいて2014年度春学期に実施した「日本語学研究X」の授業について、その構成の目的および教授内容とその意図、背景となる言語観を披露した。いわゆる日本語上級者向けの「研究科目」として設置されている本授業は、日本語学を専門に論文やレポートを書こうとしている日研究生、あるいは大学院に進学を希望している研究生が主として履修している。今期は初の試みとして、「いかに理論的に日本語の文法（統語構造）を説明するか」という点に鑑み、「文末に来る日本語の表現形式」というタイトルで授業を行った。

日本語という言語の特徴は、文末において最も顕著に、多様に現れると言っても過言ではない。テンス、アスペクト、モダリティといった項目は言うまでもなく、文末を語るうえでは、形式名詞や格助詞、接続助詞にまで言及しなければならないことがわかる。「文末」であることを厳密に解釈しようとするれば、それは、「文とは何をもって文となり得るのか」といった根源的な問いにも繋がることになる。言葉の研究にはある種の確立された言語観が必要なのであり、その言語観によって、授業の構成も大いに異なると考えられる。本稿は、筆者の考える言語観に則った授業において、どのようにして「言葉の研究の迷宮」へと、学生の興味を誘ったのかを報告する内容となっている。

はじめに

2014年度春学期に「日本語学研究X」という科目において、主として日本語・日本文化研修留学生（以下、日研究生）を対象に授業を行った。受講者は全部で13名で、国籍はブルガリア、ハンガリー、韓国、ロシア、タイ、ベトナム、中国、台湾、ルーマニア、ウズベキスタンといった国々であった。日研究生とは、本国の大学で日本語・日本文化を専攻している2年生から4年生の学部生で、日本の大学で一年の研修を受けている国費留学生のことである。

日研究生は他の一般の留学生に比べ、日本語能力が高いばかりでなく、それぞれ固有の日本語・日本文化に関する研究テーマや専攻分野を持っているのが特徴だと言えよう。したがって、日研究生としての学修ののち、本国の大学に戻り、卒業論文を書いて原籍大学を卒業してから、また、日本の大学院に進学するというケースも少なくない。幸い、本学の大学院には、言語文化研究科に日本語・日本文化専攻があり、日本で唯一「日本語・日本文化」の学位が取れる課程が設置されている。ここには、海外に居ながらにして、インターネットなどを通じて入学試験が受けられる体制も整っているため、元日研究生が再び日本の大学院に入学するという道も開かれている。したがって、本授業の構成を考えるうえでは、将来、大学院で研究の道に進むことも見据えて、学部教育レベルに必要な内容とその導入のあり方はどうあるべきかを重視して検討した。

本稿は、そのような背景に鑑みて試行した授業の実践例を報告するものである。授業を実施するにあたって、授業における学生との議論や質疑応答から、言語研究そのものへの新たな視点について度々気づかされることがあった。このような授業を通じて、現在の統語論研究のあり方に対して有益な知見が得られたことは特筆すべきことである。本稿の構成と、それぞれ

の概要は以下のとおりである。

1. 本授業科目の位置付け
2. 授業構成の概要
3. 授業のねらいと効果
4. 終わりに

初めの「1. 本授業科目の位置付け」では、大阪大学日本語日本文化教育センター（以下、CJLC）で施行されているカリキュラムの概要とその中で開設されている科目群について概観したのち、当該の「日本語学研究X」という授業科目が、どのような理念のもとに設置され、そこでどのような教学内容が期待されているかについて述べる。

次に「2. 授業構成の概要」では、実際に扱った授業項目について、授業内で配布したレジメなども引用しつつ、その内容について報告する。またそれと共に、そのような授業項目を抽出し、配置するに至った意図や背景についての考えを披露する。

そして「3. 授業のねらいと効果」では、ある授業項目に特化して、そこに込めた授業のねらいについて披露し、それが学生にどう受け入れられたのかについて報告する。

最後に、「4. 終わりに」で、本授業を実施してみたの総括を行う。

1. 本授業科目の位置付け

CJLCに入学した日研究生はまず最初に、「研修コース」と「研究コース」のどちらのコースに所属するかを選択しなければならない。前者は、どちらかと言えば、日本語の運用能力の向上に主眼を置いたものである。ここには、ひとくちに日本語・日本文化と言っても、その中には具体的にどのような学術的分野が存在するのか、そして、その中でどのような分野に興味が見出せるのか、また、卒業論文のテーマ探しをしたい、といった志向をもつ学生が所属する傾向がある。

一方、後者の「研究コース」の方は、日本語・日本文化の中の、具体的なある分野に研究テーマをもっている学生が主として所属する。原籍大学に戻ったときの卒業論文の準備に当てようとする者や、また、大学院への進学を念頭に置いて、さまざまな研鑽を積みたいといった志向をもつ者が多い。

CJLCでは、日本語という言語そのものの獲得を目指すのか、あるいは、日本語という言語を研究上の一つ的手段（道具や素材）と考え、その延長上にある日本語・日本文化における学術分野を学ぶのか、といった大きく二つの方向性を認め、日研究生のニーズに応えるカリキュラムを用意している。

このような背景に鑑み、CJLCでは大きく二つの柱からなる科目立てを行っている。一つは、「読解」「作文」「聴解」「会話」といった「読む・書く・聞く・話す」の4技能を向上させるための授業（CJLCでは、これらを「**研修科目**」と総称する）であり、もう一つは、文学、言語学、社会学など日本語・日本文化における学術分野を学ぶ授業（CJLCでは、これらを「**研究科目**」と総称する）である。

「**研究科目**」は大きく4分類され、「CUL」（文化論）、「LIN」（言語学）、「LIT」（文学）、「SOC」

(社会学) という科目番号のラベルが張られている。2014年度春学期の開講実績に基づいて、それぞれに該当する授業科目名を挙げると、以下のとおりである。

「CUL」：「日本美術史入門」「民俗学入門」「日本文化入門」「地域文化研究」 「日本文化と茶道」「比較文化研究」「日本史入門」「現代社会入門」 「宗教史入門」「宗教文化研究」「現代文化演習」「近現代史」 「日本美術研究」「中世史」「近世史」「日本服装史」 「日本の思想と宗教」
「LIN」：「日本語学入門 (音声学・音韻論)」「日本語学入門 (日本語史)」 「言語学概論」「日本語教育学概論」「日本語学研究 (方言)」 「日本語学研究 (意味論)」「日本語学研究 (語用論)」 「日本語学研究 (形態論・統語論)」「日本語学研究 (日本語史)」 「日本語学研究 (生成文法)」「日本語教育実習」
「LIT」：「日本文学入門」「日本文学史入門」「日本の伝統芸能」
「SOC」：「日本経済学入門」「社会学入門」「日本経済研究」「経営学」 「政治思想研究」「国際関係論」「社会学演習」「女性学」

本授業「日本語学研究X」は、「LIN」(言語学)の中の「日本語学研究(形態論・統語論)」に該当する授業である。

2. 授業構成の概要

本授業「日本語学研究X」において、シラバスに掲げたタイトルは「文末に来る日本語の表現形式について」であった。授業はレジメを配布して、それに沿って講義を行うとともに、受講生と一緒に日本語の言語現象について考察し、言葉の仕組みを如何に論理的に構築していくかを考察するというスタイルを取った。以下は、配布したレジメ(全16頁からなるオリジナル教材)の一番最初の部分である。初めに、この授業で扱う項目について概観することで授業計画を提示し、この授業を受講した後は、どのような学術的成果が得られるのかについての見通しをもって、受講生の学習の動機付けを行った。

日本語学研究X (日本語学研究・形態論/統語論)	2014年度 春学期
	荘司育子
文末に来る日本語の表現形式について	
《 講義予定 》	
1. 文とは？	
2. 品詞論における文末表現形式	
3. テンス・アスペクト・モダリティの概観	

4. 文末に来る文中の語句

1. 文とは？

はじめに、当該授業で日本語の形態論・統語論研究の題材に、なぜこのようなテーマを選んだのかについて、そのテーマ設定に関する見解を述べてみたい。

ひとくちに日本語の統語論といっても、その分野に含まれる項目は多岐にわたる。そのような中で、どの項目を授業テーマとして取り上げたらよいのかについては、特に以下の二つの観点を考慮した。

- ①多くの留学生（日本語非母語話者）が関心を寄せるものであること。
- ②当該項目から派生するような形で、周辺領域にまで広く視野を持たせられるものであること。

初めに①について述べる。

本センターに奉職して20年を過ぎたが、その間、日研究生が作成する論文（レポート）や海外から本学大学院へ進学しようとする学生の応募書類に添付されている小論文等について、多く目にする機会に恵まれた。因みに、毎年全国の大学で、最も日研究生を多く受け入れているのは、本センターである（2014年度に受け入れた日研究生は計65名）。また、大学院に関しては、本学の日本語・日本文化専攻には、海外に居ながらにして、大学院の入学試験を受けることができる「専修コース」と呼ばれる課程がある。このコースには、「特別プログラム」（文科省の奨学金付きで、渡航費、授業料も免除）と呼ばれる枠もあるために、毎年、海外から多くの応募がある。

このような留学生が、研究分野として言語に関するもの（日本語学）を志望している場合、筆者の印象では、以下のようなテーマ（分野）が、他に比べて、圧倒的によく取り上げられているように思われる。

- ・敬語表現
- ・受動文
- ・擬声語・擬態語（オノマトペ）
- ・若者言葉、方言
- ・授受表現（やりもらい構文）

上記のことから、日本語非母語話者がとりわけ興味・関心を示す、日本語という言語の特異性が見て取れるであろう。この中で、どちらかと言えば統語論に関わるものは、まずは受動文、授受表現であり、次に敬語表現が若干関係するかもしれないといったところであろうか。

受動文に関しては、いわゆる「迷惑の受け身」と呼ばれる構文が注目的になることが多く、また、授受表現では「～してもらう・くれる・あげる」に関わる表現性を問題にしていることが多い。いずれもこのようなテーマを選ぶ動機は、これらの表現は、日本語学習者として上級

になっても、うまく使えない、使い分けられないといった背景にあるようである。また、そのような点から言えば、敬語表現が研究テーマになりやすいといった事情もおおよそ見当が付くであろう。

受動文や授受構文に共通する統語的特徴としては、文単位のもの（構文）であることが挙げられる。したがって、述語に特異な言語形式が来るもの、という点で総括すれば、学生の興味にも多少は応えられるのではないかと思ひ、まずはその観点を授業のテーマ設定に生かして「文末に来る日本語の表現形式」とした次第である。

次に、②の「当該項目から派生するような形で、周辺領域にまで広く視野を持たせられるものであること」について述べる。

初めにも述べたように、ひとくちに日本語の統語論といっても、その分野に含まれる項目は多岐にわたるが、言うまでもなく、一科目（15回）の授業の中で扱える内容と量は限られている。したがって、考え方として極端に言えば、「狭く深く」タイプの授業にするのか、「広く浅く」タイプの授業にするのかの、どちらかを選択しなければならない。

本授業を受講できる学生は、前にも述べたとおり、主として日研究生である。同じ日研究生であっても、原籍大学における日本語・日本文化のカリキュラムや科目立て、履修状況は学生によって異なる。いわゆる日本語の運用能力を向上させる授業以外は、ほとんど受けたことがないという学生もいれば、一般言語学をはじめ、広い意味での日本語の文法論の授業を受けたという学生もいる。

一応毎回念のため、授業の初めには必ず、この授業の全容（位置付け）を概説するのであるが、音声学、音韻論、意味論、統語論、といった言語学上の学術的分野についてさえ、よくわかっていない学生もいるのが常である。

ほとんどの授業がそうであろうが、クラス内の学生間の知識（学力、語学力）の層には少なからず幅がある。理想としては、常に、上にも厚く、下にも厚く目配りをするに越したことはない。ただ、現実的には、終始そういうことをしているわけにもいかないため、少なからずある層に重点を置いた授業構成にせざるを得ない。

そこで、本授業では、「文末表現」として一括することで、あえて、テンス・アスペクト・モダリティ、助動詞・終助詞などを「広く浅く」導入しようと考えた。日本語は文末に述語が来る言語であり、構造上、最も重要な項目である述語は、種々の文法的機能をもつ形式が重なるように具現する。本来、「テンス」という文法的概念だけを取り上げても、深く多岐に展開できる内容であるのに、それを含め、いくつかの重要な文法的概念をまとめて扱おうというのは、かなりおおざっぱな話ではあろう。しかしながら、受講する学生にとっては、そもそも統語論という分野に馴染みがない場合も意外と多いという現状がある。筆者の学生時代の経験からも、全体がまだわかっていないところに、いきなり局所的なテーマを深く追求させられて、ちょっと辟易したような思い出がある。これは個人の嗜好によるのかもしれないが、ある程度全体がわかっていなければ、なぜ「それ」が取り上げるに足る重要なテーマであるのかわからないので、授業が次第に辛くなるのではないかと思ったわけである。

このような事情に鑑みて、いろいろに思いを巡らした結果、まずは「文末表現」という大枠

をとらえることにした。そして、そこには、さらに多岐にわたる興味深い項目があることについて、映画の予告編さながらに「頭出し」だけを行って、学生の知的欲求をくすぐるところで終わろうともくろんだ次第である。

次に、《講義予定》の目次に沿って、何をどのように導入していったのかを述べたい。大きな項目は4つであったが、それらとその下位項目を挙げると以下のようなになる。

1. 文とは？

- ・文の認定：それが一つの「文」であることを、どのように規定するのか？
- ・文の種類：「文」にはどのような種類があるのか？
- ・文末に来る品詞：文の終わりにはどの品詞が用いられるか？
- ・言語形式の単位：「文」の周辺・・・「語」とは？「文章」とは？

2. 品詞論における文末表現形式

- ・動詞：文末の動詞の形は？
- ・助動詞：その定義と種類は？
- ・終助詞：その用途と種類は？

3. テンス・アスペクト・モダリティの概観

- ・テンス
- ・アスペクト
- ・モダリティ

4. 文末に来る文中の語句

- ・「文末に来る」格助詞・接続助詞
- ・「文末に来る」形式名詞

初めに「1. 文とは？」について述べる。

ここでは、山田孝雄、時枝誠記、橋本進吉、松下大三郎について紹介し、それぞれの言語観において、まずは日本語における「文」をどのように定義しているのかを見た。統語的（形態的）な観点から、あるいは、意味的な観点から、または統語的・意味的を合わせた観点から「文」を規定しようとするればどういうことになるのか。言葉の定義が如何に難しいことであるのかを、例文を通して議論しながら考察した。

1. 文とは？

文の認定：それが一つの「文」であることを、どのように規定するのか？

統語的な観点から →

意味的な観点から →

(例)「学校に行く。」vs「きれい!」「うるさい!」「私、学生。」

「鳥がいる。」vs「あ、鳥!」

「学校に行く。」 vs 「学校に行くとき、雨が降ってきた。」

「今、母はいません。」 vs 「今、母はませんが。」

「一人で（怖くて）行けないでしょ？」 → 「行けるよ。」 vs 「行けるよ、一人で。」

「行く」（辞書の見出し） vs 「行く！」 「行く？」

次に、統語論の中で、「～文」というような構文名が付いているものを例文とともにできる限り挙げてみた。そして、それがどういう観点からの分類なのかを考察してみた。また、その際に「～文」ではなく「～表現」と呼ばれているものについても言及し、そこに見える言語現象のとらえ方について概観した。

文の種類：「文」にはどのような種類があるのか？

統語的な観点から →

意味（機能）的な観点から →

- (例) (1) 単文 重文 複文
- (2) 主文 従属文 補文
- (3) 平叙文 否定文 疑問文 命令文 感動（感嘆）文
- (4) 能動文 受身文 使役文
- (5) 名詞述語文 形容詞述語文 動詞述語文
- (6) 現象描写文 遂行文
- (7) 強調構文 ハガ構文 係り結び構文
- (8) 自動詞文 他動詞文
- (9) 事象叙述文 属性叙述文
- (10) ノダ文 テイル文
- (11) ウナギ文
- (12) 倒置文 引用文

cf. 可能表現、推量表現、勧誘表現、依頼表現、感情表現、感謝依頼、謝罪表現、授受表現
接続表現、条件表現

そして、次に、「文末に来る品詞：文の終わりにはどの品詞が用いられるか？」を提示し、学校文法における品詞分類表（全部で11品詞）を示したあと、文末には、どのような品詞が来ているかを例文を通して考察させた。そうすると、文末に来るのは、決して用言の類だけではなく、連体詞・副詞・接続詞以外のほぼすべてが、普通に文末に現れることに気づくこととなる。

そして最後に、「文」という言語形式の単位が、何に対比されるものなのか、そして、最終的には「文」はどう規定できるのかについて考察した。

言語形式の単位：「文」の周辺・・・「語」とは？ 「文章」とは？

統語的な観点から →

意味（機能）的な観点から →

(例) 「虹」 vs (空を見て) 「虹！」

「学校に行く。」 vs 「学校に行くこと」

「試合のとき、雨が降ってきた。」 vs 「試合をしているとき、雨が降ってきた。」

「ゆでる野菜」 vs 「ゆでた野菜」 vs 「ゆで野菜」

「街を歩く人々」 vs 「街を歩いた人々」 vs 「街の人々」

「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。

意地を通せば窮屈だ。 兎角に人の世は住みにくい。」 夏目漱石『草枕』より

「最近 一人で 考えることが 多くてね それで よく 思うんですけど 幸せって
何だろうって つくづく 考えちゃうのね これってね 自分でもね なんか
よくわからないんですけど 要は 今 自分自身が 幸せだって 感じることを
できたら ひょっとしたら それが 幸せって ことかな なんて 私って 最近
やっぱり ちょっと 変ですよ」

次に「2. 品詞論における文末表現形式」について述べる。

ここでは、「文末」に来る典型的な言語形式である動詞、助動詞、終助詞について、品詞論の観点から見た形態的特徴、統語的特徴について考察した。まず、動詞の活用の種類と活用形を提示し、「活用形」とは何に基づいた分類であるのかについて考えさせた。

終止形：「活用形の一つで、文の言い切りに用いられる形。言い切りに用いることで動詞の基本形ともされる。」 『日本語文法大辞典』明治書院より

→ 「言い切り」とは、単独で文末に来ることができるという意味？

- (1) 日本語の本を読む。 …… 終止形
- (2) 日本語の本を読み。 …… 連用形で、助言や指示を表す用法。
- (3) 日本語の本を読め。 …… 命令形は、「言い切り」ではない？

→ 文末には、終止形以外にも連用形や命令形が来る。

→ そもそも「活用形」とは、何を表すものなのか？

統語的な観点から →

意味（機能）的な観点から →

そして助動詞に関しては、学校文法における語の種類と活用形をすべて挙げ、特に活用形については不規則なものも多く含まれていることに気づかせた。そして、さらに、学校文法では一般に「助動詞」とは呼ばれていないものなども挙げ、助動詞とはどのような範疇を指す言語形式なのかを考察させた。

助動詞「う」の活用形 例「学校へ行こう」(意志)

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
う	○	○	う	(う)	○	○

その他の助動詞

「書かせる (見させる)」「書かたい」「書かたがる」「雨らしい」「書くようだ」
 「書かない」「書かぬ」「見よう」「書くまい」「書かます」「雨です」

- (1) あれ?地面がぬれている。そうか、雨が降ったんだ。
- (2) 5年も日本に住んでいたのか。どうりで、日本語がべらべら話せるわけだ。
- (3) 今日はこの薬を飲んで、とにかくゆっくり寝ることだ。
- (4) 楽しい時間はあっという間に過ぎてしまうものだ。
- (5) 今、ちょうど帰って来たところだ。
- (6) そろそろ迎いの車が到着するはずだ。
- (7) レポートは明日までに提出しなければならない。
- (8) 明日は雪が降るかもしれない。
- (9) 彼もこのことを知っているにちがいない。

統語的な観点から →

意味(機能)的な観点から →

そして、終助詞に関しては、学校文法で取り上げられるほぼすべての語とその用法について、文脈を与えながら具体的に解説した。そのうえで、終助詞の中には、文末に来ないもの(別の語であると認定されるもの)もあること、また、間投助詞と呼ばれるものについても言及し、そういった助詞の類がもっている統語的な特徴、共通点について考察した。

「こと」：感動、質問

(例) まあ、すてきなドレスだこと!

私と一緒に行きませんかこと?

「かしら」：質問・疑問、願望

(例) 今、何時かしら。↗ / ごいっしょして、よいかしら。↗

早く春が来ないかしら。↗

→ 終助詞は必ず「文の終わり」に付く? 「間投助詞」とは?

次に「3. テンス・アスペクト・モダリティの概観」について述べる。

ここでは、まず、テンス・アスペクト・モダリティの定義について、『日本語文法大辞典』の

記述から定義し、それが日本語では具体的にどのような言語形式で表されているのかを見た。テンスについては、「現在・過去・未来」という事態は、どのような方法で表すことができるのか、また、「ル形・タ形」に代表される形が文末に来たとき、それは「現在・過去・未来」のいずれを指すのかを考察した。

3-1. テンス

ル形とタ形：現在・過去・未来

- (10) a ここにピアノがあります。
b 大阪でたこ焼きを食べます。

→ テンスは？

→ 日本語でテンスを表すにはどのような手段があるか？

アスペクトという概念については、日本語の場合、テンスを担う形式と同じ形で現れることがある。このような特徴を従属節における例で示しながら導入した。

3-2. アスペクト

ル形とタ形：完了・未完了

- (12) a 学校へ行く途中、田中さんに会った。
b *学校へ行った途中、田中さんに会った。
(13) a *お腹が痛くなるとき、この薬を飲みます。
b お腹が痛くなったとき、この薬を飲みます。

→ テンスは？

→ 「どこで」田中さんに会ったか？「いつ」薬を飲むか？

アスペクトに関しては、この他にもテイル形にまつわる動詞の四分類、文末に現れる特殊なタ形（「さあ、安いよ。買った。買った。」などの例）について導入した。

そして、モダリティに関しては、それが「話し手」「発話時」「主観的」という特徴をもつことを挙げ、言語形式として取り出せるものとそうでないものがあることを考察した。また、一方で、モダリティは文末専用の形式であり、文末以外（連体修飾の節内）には馴染みにくいことを気づかせた。

3-3. モダリティ

- (29) 雨が降る（ようだ／はずだ／らしい／かもれしれない／だろう）
(30) 私は新しいコートが欲しい。
(31) 僕は今日の昼御飯にはカツ丼が食べたい。
(32) 私は明日の試合は阪神が勝つと思う。

→ 下線部の主語を「田中さん」に入れ替えると？

- (33) 明日はきっと晴れるだろう。
- (34) 二度と酒は口にするまい。
- (35) 僕と結婚しよう。
- (36) 今度こそ絶対勝つ。

→ 「過去」を表す出来事に言い換えられるか？

- (37) 被災地に水や食料を届けよう。
→ *被災地に届けよう水や食料 (cf. 被災地に届ける水や食料は…)
- (38) 包丁で被害者を刺したな。
→ *被害者を刺したな包丁 (cf. 被害者を刺した包丁は…)
- (39) 12時に約束の場所に行け。
→ *12時に行け約束の場所 (cf. 12時に行く約束の場所は…)
- (40) 5月に鈴木君と結婚するそうだ。
→ *5月に結婚するそうな鈴木君 (cf. 5月に結婚する鈴木君は…)
- (41) 太郎君は大阪大学に合格したみたいだ。
→ *太郎君が合格したみたいな大阪大学
(cf. 太郎君が合格した大阪大学は…)

→ なぜ連体修飾節内にモダリティが入りにくいのか？

次に「4. 文末に来る文中の語句」について述べる。

ここでは、まず、格助詞の「が」「を」、接続助詞「から」「のに」を例にして、それが文末においてある種の表現効果を醸し出しているような例文を考察した。いわゆる「言いさし文」とも呼ばれているもので、終助詞的な用法をもっていることを考察した。

4-1. 「文末に来る」格助詞・接続助詞

- (42) a (支払いをしようと、財布を取り出して) あっ！お金が…。
- b (一ヶ所だけシャツのボタンが留まっていないのを見て) あのう、ボタンが…。
- c (映画に誘われたものの、実は行きたくなくて) ちょっと都合が悪いんですが…。
- d (電話で田中部長はいるかと聞かれて) 今、ちょっと席を外しておりますが…。
- (43) a 自分でやればいいものを、なぜ人にやらせようとするのか。
- b 私から連絡すべきところを、わざわざお電話を頂戴してすみません。
- c ああ、彼も愚かなヤツだ。ひとこと俺に話してくれればいいものを。

- ※ 格助詞寄りの「が／を」 ← 「が／を」 → 接続助詞寄りの「が／を」
- ※ 接続助詞の「が」「を」「に」「と」「から」は歴史的には格助詞に起源がある。
- ※ 接続助詞寄りの「が／を」 → やがては「モダリティ形式」へ

また、言語形式だけを見れば、いわゆる形式名詞と同じ形態をもっているものとして「こと」を挙げ、これもまた、格助詞や接続助詞などと同様に文末においてある種の表現効果を発揮し、現代日本語文法では、モダリティ表現の一つに位置づけられていることを見た。

4-2. 「文末に来る」形式名詞

- (46) a 「顔が広い」というのは、知り合いがたくさんいることだ。
 b 今日は一日、安静にして寝ていることだ。
- (47) a 一番わからない点は、彼が強固に反対しているわけだ。
 b なるほど。道理で、彼はあんなに日本語がうまいわけだ。
- (48) a 箕面市は、私が住んでいるところだ。
 b 今、ちょうど帰ってきたところだ。
- (49) a 私が描いた絵は、星空を背景に宇宙船が飛んでいるのだ。
 b 無駄に過ごしたと思う必要はない。どんな経験も決して無駄ではないのだ。

- ※ 本来の名詞としての用法 → 文末に来ることによって「モダリティ化」
- ※ 機能語（格助詞、接続助詞、形式名詞）は、文末において「モダリティ化」する傾向
- 一種の「文法化」現象か？

授業の最初の方に、文が文であることの定義について考えたが、統語的な（形態的な）観点から言えば、文中にある言語形式が往々にして文末に用いられるといった「文法化」が、その定義を困難にしているのではないかという見解を披露し、今後の研究分野の裾野を暗示して一連の講義を終えた。

- ※ 「陳述」は「そこが文末である」とする統語的標識と言えるのでは？
 - 「陳述」に相対する「そこはまだ文の終わりではない」とする統語的標識がある？
 - いわゆる格助詞、接続助詞などは、「そこはまだ文の終わりではない」とする統語的標識に相当するのでは？
- ※ ある単語及びその連続が「一つの文」であるためには、その文末に、「そこが文末である」ことを示す統語的標識がある。（→ cf. 「陳述」）
- ※ 「そこが文末である」ことを示す統語的標識は、元をたどれば「そこはまだ文の終わ

りではない」ことを示す統語的標識である。

→ 「文」とは？

3. 授業のねらいと効果

本授業は、「研究科目」であることからわかるとおり、内容的には日本語母語話者向けに講義されるものと全く同じ内容のものである。そのような内容を日本語で講義するにあたっては、説明に使用する言葉、特に漢語系の語彙については、できるだけ言い換えを施すなどして、言葉を選んで語りかけるといったことに留意した。また、授業内で使用する日本語の語彙や表現、表記の類い以外のことで留意した点として、特筆すべきことがある。ある意味で、授業の構成や進め方に関わる重要な事柄であり、日本語母語話者を相手に授業を行うときは明らかに異なる点である。

それは、日本語非母語話者が、日本語の統語論を研究しようとした場合、彼らにとって最も懸念される点は、日本語母語話者のような文法性判断が下せないことである。

日本語母語話者による統語論研究では、しばしば、ある表現（構文）の「用法」といった側面が考察される。しかしながら、例えば、ある表現には、Aという用法とBという用法があるとした場合、そのAとBを見分ける方法というのは、文脈やニュアンスといったことによる場合が多く、多分に意味的な側面を言うことが少なくない。「Aの用法であれば、〇〇の語句と共起する」と言った場合は、まだ客観的に検証できる性質を保っているが、それでも、「〇〇の語句」は、品詞分類上で言う同じ範疇に属するものであれば、すべて当てはまるかと言うとそうではない。実際は、「〇〇の語句」が「意味する」ところによって、用法の違いが判定されるという傾向にある。

このことについて、例を一つ挙げてみよう。例えば、助詞「は」と「が」の使い分けを問題にするにあたり、「は」には、一般に「主題」と「対照」の用法があるとされている。

- (1) 私は田中と申します。
- (2) コーヒーは飲みませんが、紅茶は飲みます。
- (3) 今日はそちらは天気はいかがですか。

一般に(1)の「は」は「主題」で、(2)は「対照」であるとされる。なぜかと言えば、(1)には「私」以外に比較対照となる人物が想定できない（すなわち、田中であるのは、「彼」ではなく「私」だ、というようなニュアンスが感じられない）からである。それに対して(2)が「対照」という用法であるのは、表現上からも明らかに「コーヒー」と「紅茶」が比較対照となり得ることが明示されているからである。

では、(3)に複数出てくる「は」は、それぞれどちらの用法の「は」であろうか。その答えは、「文脈によって、それぞれ「主題」にも「対照」にも解釈できる」といったところではないだろうか。つまり、「今日は」の部分に関してだけ言えば、もし、この発話の前に、「昨日は大変で大変だったが、一夜明けて天気は回復したのだろうか」というような含みがあったのであれば、これは「対照」の「は」と言える。しかし、もし、スタジオにいるアナウンサーが、中

継で繋がっているリポーターに呼びかけているような場面であれば、「主題」だということになるであろう。

ちなみに、格助詞「が」についても状況は同じであり、ある学説によれば、「が」には「中立叙述」と「総記」という用法があるという。

(4) 太郎がこの事件の犯人です。

(5) 私ではありません。太郎がこの事件の犯人です。

上記の(4)の「が」は、「犯人である」ことの主体を指す以上のことは表していないために「中立叙述」の用法だとされている。一方、(5)は、文脈からも明らかに「犯人は他でもない、太郎である」といったようなことが読み取れるもので、ここでの「は」には、何か主体を取りたてて描写している感がある。それで、「中立叙述」とは区別して、「総記」という用法の「が」であるとするわけである。

しかし、これこそ一目瞭然であるが、(4)も(5)も「太郎がこの事件の犯人です」という言語形式の連続には異なるところがないのに、片や「中立叙述」の「が」で、片や「総記」の「が」だとするのは、少なくとも狭い意味での統語論の範囲では扱えないものではないだろうか。

「は」と「が」は、両者とも名詞を受けている助詞であり、どちらも「主語」に相当しそうな位置に現れる。しかし、「主題」と「対照」、あるいは「中立叙述」と「総記」の見極めには、ある種の前提（非言語的要素も含む）のうえに成り立っているものをうまく「察して」、用法の判定をしなければならない。このような考察のあり方は、日本語非母語話者にとっては、決してたやすいことではないであろう。

確かに、統語論を「文法」といった広い意味でとらえるならば、「形式・意味・機能」といった全てが対象になるので、「用法」といったことも扱わなければならない。しかし、筆者の見解では、「統語論」というのは、もう少し限定した範疇のものを研究対象にする分野ではないかと思われる。そうすると、さきほどの「は」と「が」の考察は、文脈の中でどう解釈できるかという議論に他ならないのであるから、統語論ではなく、語用論の分野に近い見解のように思われるのだが、どうであろうか。

いずれにせよ、このように「用法」を扱うのは、日本語非母語話者が統語論を研究する際には、かなり注意を要することを指摘しておきたい。そして、彼らの中には、将来大学院に進学し、統語論の分野の研究者になることもあるかもしれない。彼らにとっては、「ネイティブの直観」といった文法性判断を必ずしも必要としない研究手法の方が手堅いのであるから、本授業では、そういった考察のあり方を見せておくことよいのではないかと考えた。そのようなわけで、できるだけ形態の差を問題にするような観点を採用して、授業を展開することを心がけた次第である。

なお、本授業について学生から寄せられた意見であるが、授業アンケートなどを見る限りは、知的興奮が得られた旨のコメントが寄せられ、概ね好評だったようである。ただ、中には、結局「文」は規定できない、といった結論に対して、もどかしさが残った旨のコメントも見受けられた。確かに、系統立てられた新しい知識を獲得したい、あるいは、問いに対する明快な「答え」を期待してしまう学生の気持ちもわからないでもない。しかし、統語論研究というのは、

既存の概念を疑ってかかるところに新たな発見の余地があるのであり、また、そのような過程こそが面白いのだという印象を個人的には持っている。そのような研究のあり方を見せようとした授業であっただけに、ある意味、そのような意見も致し方ないであろう。

ただ、授業の様子全体を通して言えることは、学生が自発的に議論（考察の過程）に参加し、思い思いに自分の言葉で説明を試みようといった姿勢が終始感じられたことである。教師による一方的な語りではない授業だった点が、図らずも学生に受け入れられた一番の理由だったのかもしれない。

4. 終わりに

日本語の運用能力を上げる「研修科目」の授業とは異なり、「研究科目」は多かれ少なかれ、ある学術分野の狭い範囲のことを扱う。そのため、たまたまその分野に興味が合致した場合は学生に好意的に受け入れられるが、そうでない場合は、授業が進行するにつれて、学生はどんどん置いてきぼりになってしまうきらいがある。特に本授業は、知識取得型のもではなく、決定的な結論が得られるものでもない。本授業のように、日常的に目にする言語現象に対して、とことん理詰めで言葉の仕組みを構築していこうとするものであれば、なおのこと、多くの学生が一樣に高い関心をもつ分野ではないであろう。そのような中で、本稿では、一つのケーススタディとして、どのように授業を組み立てようとしたのかについて、独自の視点と構成上の留意点を述べてみた。

教室での教員と学生のいるこの空間は、一期一会の関係であり、授業というのは、全く同じものは二度と再現はできない。今回、たまたまうまくいった導入が、また次もうまくいくとも限らない。ただ、教育という現場に必要なある種の「心がけ」、そして、統語論の分野に関する授業であれば、ある種の「言語観」が、授業の成功のカギを握っていると言えるのではないだろうか。

【 参考文献 】

- 井手 至 (1967) 「形式名詞とは何か」『講座日本語の文法 3』明治書院。
井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 (上)』大修館書店。
大久保忠利 (1968) 『増補版日本文法陳述論』明治書院。
尾崎知光 (1976) 「文法研究の歴史 (1)」『岩波講座日本語 6 文法 I』岩波書店。
金田一春彦 (1976) 「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房。
久野 暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店。
白川博之 (2009) 『言いさし文の研究』くろしお出版。
寺村秀夫他編 (1987) 『ケーススタディ日本文法』桜楓社。
時枝誠記 (1941) 『国語学原論』岩波書店。
橋本進吉 (1948) 『国語法研究』(『橋本進吉博士著作集』第二冊) 岩波書店。
古田東朔 (1976) 「文法研究の歴史 (2)」『岩波講座日本語 6 文法 I』岩波書店。
松下大三郎 (1924) 『標準日本文法』紀元社。
山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』宝文館。
渡辺 実 (1971) 『国語構文論』塙書房。

Paul J. Hopper and Elizabeth Closs Traugott (1993) *Grammaticalization*. Cambridge University Press.

(日野資成訳『文法化』(2003)九州大学出版会)

『日本語文法大辞典』明治書院.

附記

本研究は、2014年度に採択されたCJLC特別研究費Ⅱ「日本語の研究をめざす留学生のための教育に関わる研究」による成果の一部である。

(しょうじ いくこ 本センター准教授)